

メルトリリスと秋葉原デートに行く話。

「んっ……はぁ……」

長い旅路を終え、ようやく降り立った空港にて。

軽く伸びをして凝り固まった筋肉をほぐす僕の耳に、不服そうな声が届いた。

「面倒なものね。この程度の距離を移動するのに、こんなに時間がかかるなんて」
おそらく彼女が元いた、本物の電子の海の話をしているのだろう。

あちらの世界で彼女はほぼ一瞬でどこにでも移動できたらしい。さすがは電子の海。いつかもう一度訪れてみたいものだ。今度はちゃんと安全が確保された上で。

「ごめんね、退屈させちゃって。ゲームの一つでも持ってくればよかったね」

詫びの言葉を告げながら、僕は愛しい彼女の顔を一目見ようとして、

——何もない宙を見た。

「……あれ？」

いるべきはずの場所に彼女がいないという事態に、思わず頭上に疑問符を浮かべた直後。

「ここよ、ここ」

そんな言葉とともに、ついと服の裾を引かれた。

それにつられるようにして視線を下げると、

「……………」

そこには、こちらを不機嫌そうな目で睨んでくる美少女の姿があった。

長い藤色の髪。

凍てついた湖のように冷たい瞳。

極限の造形美を追求した体。

氷の女王が如き雰囲気をもって周囲の旅行者をざわつかせるのは、僕の大事なサーヴァントにしてBBのアルターエゴ、メルトリリスだ。

彼女は騒がしくなり始めた周囲をまるで気にした様子もなく、こちらを”見上げて”くる。

そうだ。先程まで長時間機内の座席に座っていたから忘れていたが、今日の彼女はいつもより幾らか身長が低くなっているのだった。

「ご、ごめん！ いつもはこのくらいの高さに顔があるから、つい……」

慌てて謝った僕に、彼女、メルトリリスはフン、と鼻を鳴らしてから、優しげな微笑みを見せた。

「別にいいわ。私だっつてついさつき、いつものように貴方を見下し……見下げようとしたもの」

「メルトリリス……」

この寛容さ！ これも彼女の長所の一つだ。

パッションリップがいるためか、彼女はこう見えて意外と慈愛的な側面があつて、マスターである僕も時折その恩恵を受けていたりする。うん、今彼女絶対『見下し』つて言いかけたけど今回は水に流すとしよう。

メルトリリスは優しいなあ、と穏やかな気持ちで僕は彼女を眺めていたのだけど、
「……………」

「どうかして？ マスター。私の事を、ぼーっと眺めているようだけど」

「あ、いや……こう見ると、メルトリリスは小さいな、と思つて」

そう返した僕に、メルトリリスは挑発的な笑みを浮かべて、

「何？ 長身の女性の方が好み？」

「いや、別に……僕的にはメルトリリスが一番かな」

あはは、と笑いながら告げた途端、

「ッ……………!!」

彼女の顔は、一瞬で紅潮した。

「貴方はまた、そんなことを素面で……………!!」

「ご、ごめんなさい!」

「……………いいわよ、別に。好きなかだけ言えればいいじゃない。この女たらし。どうぞせど
の子にも同じことを言っているのでしょうか?」

「そんなバカな。ランスロットじゃあるまいし、そうぼんぽんと甘い言葉なんて吐
けないよ。……………キスもデートも、君としかしたことがないんだ。きっと、これから
もずっと」

「……………」

「経験値の低いマスターで申し訳ないけどね」

そう言って苦笑した僕に、メルトリリスはフツとニヒルに笑ってみせた。

「……………問題ないわ。男は女が育てるのが道理なもの」

「やだ、メルトリリスかつこいい……」

「冗談言わないで。いつもカッコいいでしょう?」

「いや、いつもは可愛いかな……」

「……………」

「ごめん。悪かったから袖で叩かないで」

「まったく……タチの悪さで言えば、湖の騎士と大差ないわよ貴方」

「ランスロットには申し訳ないけどすぐく心に来るねその評価……」

「ホント、どうしてこんな男を好きになってしまったのかしら……」

「はあ、と彼女は一つ溜息を吐いて。」

「まあいいわ。貴方の平常運転に呆れてばかりいたら時間が勿体ないもの。早速、

エスコートでもしてもらおうかしら? 私のマスター」

「うん。それじゃあ……」

言つて、手を差し伸べた僕に、メルトリリスは一瞬ためらったものの、いつもの萌え袖スタイルで服の上から僕の手を握ってきた。

「……もうちよつと強くお願いできるかしら」

「あ、うん……ごめんね、気が利かなくて」

「いえ、私の体質の問題だもの。合わせてくれるだけでも十分よ」

「……………」

「ッ……そ、それは少し強すぎるわね」

「ご、ごめん、つい…………」

「毎日のように握っているのだから、多少は慣れていると思ったのだけど。これは、もっと私の身体を覚えこませないといけないわね」

「ただ手を握るだけなのになんでそんな言い方になるのさ…………いや、その…………君と初めてのデートなんだって思ったら緊張しちゃって」

「……………」

「メルトリリスはすごいよね。いつも通りで」

「…………いつも通りに見える?」

「え?」

呆けた声を漏らした直後、

「っ…………!!」

きゅつとメルトリリスはこちらに抱きついてきた。

「め、メルトリリス!？」

慌てる僕に、しかし彼女はその抱擁をより強固なものにしながら、

「……伝わってこない？」

「え？」

「私の、鼓動」

言われ、そこでようやく、密着した彼女の身体から伝わってくる心臓の音が、普段のそれより遥かに早まっていることに気づいた。

僕の胸に頬を寄せながら、彼女はくすりと微笑んで。

「馬鹿ね。大好きな彼との初めてのデートに緊張しない女なんていないわよ」

「ご、ごめん……」

「別にいいわ。そういう鈍感な所も好きだもの」

「メルトリリス……」

「あとは、そうね……こういう時にちゃんと抱きしめ返してくれたらもっと好きになるかしら」

「……気が利かずすみません」

「ええ、次からは期待しているわ」

そう言つて、物の見事に僕を尻に敷きながら、

「マスター……」

幸せそうに僕の胸へ頬を寄せるメルトリリスに溢れんばかりの愛おしきを感じながら、僕はここに至るまでの経緯を思い出していた。

部屋で二人きり、いつものようにベッドの上で彼女に膝枕をして甘やかしていた時、僕は彼女をデートに誘つた。

「秋葉原？ フィギュアがたくさん売っているという場所よね？ そこに連れて行つてくれるというの？」

「うん。ダヴィンチちゃんが三日もお休みをくれたから」

僕の膝枕に頭を載せたまま、目を丸くするメルトリリスに僕は頷く。

ダヴィンチちゃんからもらった休暇を使つて、フィギュア好きな彼女が行きたそ

うな場所へ行こうと思ったのだ。

「ほら、メルトリリスはフィギュア好きって言ったでしょ？ あそこなら、たくさんフィギュアが置いてるって聞いたから」

「そう……私の趣味、ちゃんと覚えていてくれたのね。優しい人」

彼女は嬉しそうに微笑み、しかしその直後、表情を曇らせた。

「……でも、私のこの脚じゃ、街に出るのは難しそうね」

言いながら、メルトリリスの視線は自身の脚へと向かう。

膝のある棘。鋭利な脚。

秋葉原の街を歩くどころか、飛行機の座席に座る事すら怪しいかもしれない。

「ごめんなさい、マスター。せつかく誘ってくれたのに……」

「いや、そんな……僕こそごめん、誘うことに夢中になって、色々考えが及ばなくて」

「謝らないでいいわ。気持ちだけで十分に嬉しいもの」

言いながら、彼女は体を起こし、それからそっと、僕の首へと腕を回ってくる。

宝石のような瞳には、どこにでもいそうな男の顔が写っているのが見えた。

「マスター。私のマスター。その溢れんばかりの優しさに、お礼をさせてください」

「メルトリリス……」

「マスター……」

僕をまっすぐに見つめながら、彼女は僕との距離をゆっくりと詰め、

「話は聞かせてもらった」

「っ!？」

唇が触れる直前で、突然の来訪者の声にその動きを止めた。

「その声は……エロタイツ師匠!!」

「その胡乱なあだ名には後で説明を要求するとして……少し邪魔をするぞ」

「少しどころじゃないわよ! 帰って! 早く帰って! そしてすべてを忘れ

て!!!」

「生娘ではあるまいし、キスを見られた程度でそう騒ぐな。……ん、いや待て。も

しやお主、未だ生娘か……?」

「し、仕方ないでしょう!? この人が奥手なのだから!」

「ストップ! メルトリリスストップ! そういふナイーブな話を他所に公開し

ないで！ お願い！」

「毎晩毎晩迫っているというのにこの人は……！！！」

「そ、そうか……いや、からかって悪かった。詫びを言っただけだが、お主に手を貸してやろう」

「え？」

「その脚の件だ。お主さえよければ、旅行の間だけ調整することはできる」

「し、師匠、それ本当？」

「うむ。身体的特徴程度の改変などルーンでチョイだ、チョイチョイだ」

「ルーンすごい……」

「ルーンではなく儂がすごいと言え」

「師匠すごい……すごいですけど、また前みたいに戻し方忘れてりませんかよね？」

「いやまさかにはそんなそんな。……ああ、待て。そんな本気な目で見るな。万が一に備えて、セタンタにも伝えておくから安心しろ」

あとは本人の意思次第という話だ、と師匠はメルトリリスを見た。

「メルトリリスは、いい？」

僕としてはぜひとも師匠の手を借りたいところだけど、彼女としてはどうだろうか。

リップもそうだけど、彼女たちは己の異形について時折不便さを感じこそすれど取り替えたいとまでは思っていないなかったはずだ。

それを旅行の間だけとはいえ、普通の手足に変えてしまってもよいのか、と不安に思いながら問うたわけだけだ。

「……………」

彼女は沈黙を続けていて。

「メルトリリス？」

改めて問いかけた僕に、メルトリリスは、

「……………」

ほろり、と涙を流した。

「め、メルトリリス!! ど、どうしたの!!」

慌てる僕に、彼女はふるふるとう首を横に振って。

「ごめんなさい……言葉にもできないくらい、嬉しいの」

「え？」

呆けた声を漏らした僕の眼前、彼女は目尻に涙を浮かべながら、

「まるで普通の恋人のように、貴方とデートできるのでしょ？ このカルデアで暮らすことに、何一つ不自由は感じていなかったけれど、それでもそういったことに憧れていた事は否定できない。だって、私も女の子ですもの」

「メルトリリス……」

「いいのね？ マスター。私、デートコースには結構うるさいわよ？」

「そう言われると不安になってきた……」

「冗談、冗談よ。貴方といるのなら、私はどこで何をしていたって……」

目尻の涙を僕に拭われながら、メルトリリスは微笑んで。

「でも、少しくらいは期待しておくわ。……たくさんときめかせてね、私のマスタ

」

そんな可憐な言葉を、僕に送ったのだった。

そんなわけで僕は秋葉原へとデートにやってきていた。

メディアとスカサハ師匠の協力により、今の自分はここにいながらもいつでもレインソフトが可能、つまりいつでも特異点へ向かえる状態になっている。

魔術ってすごい。改めてそう思った。

そんな自分をよそに、メルトリリスはフィギュアを眺めている。

「これは……十周年記念限定モデル！まさか実物を目にする事ができるなんて

……。……!?!? こっちは雑誌通販限定の!?!? 未開封品が存在していたというの!?!?」

言ってることはよくわからないが楽しそうだ。連れてきてよかった。

はしゃいでいるメルトリリスを隣で眺めていると、視線に気づいたのかメルトリリスがこちらを見上げてきた。

「……何？そんなにジロジロ見て。フィギュアオタクは気持ち悪い?」

「いや、全く。はしゃいでるメルトリリスは可愛いなって」

「なっ……!?!?」

いつものように可愛く頬を染めたメルトリリスは、しかしぼん、と僕の胸に手を当てながら首をふるふると横に振った。

「……ダメよ、マスター。この場所でそれはダメ」

「え？」

「フィギュアショップでいちやつくなんて、出禁にされてもおかしくない所業だもの」

「そ、そうなんだ……」

見れば、周囲のお客さんからの視線が人を殺せそうなそれに変わっている。怖い。でも気持ちからは分からなくもない。僕だってこんな可愛い女の子とイチヤイチャしてる男がいたら同じ目をしていたと思う。

「……だから、一旦出しましょう。さっき、ここに来る途中にちょうどいい路地裏を見つけたから、そこに行きましょう」

「ちょうどいいって何」

「いいから」

「いいからって……」

半ば釈然としないまま、僕はメルトリリスに手を引かれ店を出た。

そして、

「……結構かがまないと駄目だねこれ」

「ええ、跪きなさい」

「いやそこまでじゃないでしょ……」

路地裏で5分ほど過こした後、店へと戻ったのだった。

ファイギニア店をいくつか回った後、僕らはパンケーキ屋さんへと入った。

「ファイギニアは買わなくてよかったの？ 一応軍資金は用意してたんだけど」

「ええ、目にするのができただけで十分よ」

それに、とメルトリリスはくすりと微笑み、

「私が求めるものとなると、貴方の財布では到底手が届かないものばかりだから。貴方が将来、高収入の優良物件になることを期待しておくわ」

「優良物件……なれるかなあ……」

「……不安そうな顔しないでいいわよ。別に、高収入にならなくたって私はずっと……ええ、そうね。こういう時にちゃんと手を握ってくれる貴方なら、何も心配な

「いわ」

そうしてしばらく、僕らは手をつないだままいたのだけど、

「あら、注文が来たわね。ごめんさい、手が邪魔よね。私の彼、寂しがり屋なの。ええ、そこに置いてちょうだい」

「……………」

「？ 顔が赤いけど、どうかしたの？」

「い、いや……………何でもない、です……………」

『私の彼』呼びに致命傷を受けた僕を不思議そうに見つめながらも、

「まあいいわ。とりあえず、いただくとしましよう」

メルトリリスの興味は間もなく到着したパンケーキへと移った。

「これがパンケーキ……………カロリーの塊ね。これ、本当に女の子の食べ物なの？ 太るための食物ではなくて？」

「メルトリリスだって食べたなら太るかもしれないよ？」

「私はいいのよ。完成しているもの。それとも何？ 少しくらい肉付きが良くなつた程度でか弱い乙女を見捨てるほどあなたは冷たい男だったかしら？」

「そ、そんなことは……」

「冗談よ。あなたが私の虜なのは知っているわ。……ふふ、顔が赤いけど風邪でも引いたの？」

「わ、分かって聞いているだろメルトリリス……ほ、ほら、僕のことはいいいから早く食べよう」

「ええ、そうね。冷める前にいただきましょう」

彼女の言葉に頷いて、フォークを構えたところで、

「……ねえ、マスター」

「何？」

「これ、食べさせてもらえるかしら？」

「は？」

「ご存知の通り、手が不器用でフォークをうまく持てないの」

「い、いや、カルデアでは普通にご飯食べれてたでしょ？」

「覚えてないわね。ほら、早く。あーん。あーん」

「……あーん」

「あむ……おいしい。甘くてとろけてしまいそうだね。あなたの手で食べさせてもらえたからかしらね」

「……………」

「もつとちようだい。あなたの手で、たくさん甘やかして？」

頬を赤らめながら沈黙した僕に、メルトリリスはしばらく甘えていたが、

「……そうね。私だけでは不公平よね」

ふと、思い出したかのようにそう言っ

「じゃあ私からも食べさせてあげる」

言いながら、フォークを手を持った。

「さ、さつきフォーク持てないって言ったくせに！」

「過去にこだわる男はモテないわよ。ほら、恥ずかしがらずに口を開けなさい」

「ぐ、ぐう……あー」

大人しく口を開けた僕に、メルトリリスは淡く微笑んで、

「はい、あーん」

甘い声で、僕にパンケーキを食べさせた。

「どう？おいしい？」

「うん、おいしい。いや、ここの店のパンケーキは最高だね。甘さが程よくてさ」
「……よかった」

照れ隠しに言葉をつらつらと並べる僕に、メルトリリスはにこりと笑ってみせる。
その上機嫌そうな表情に、僕はまた言葉を失ってしまう。

「こうして2人で甘いものを食べていると、まるでカップルみたいね、私たち。周りからも、そう見えているのかしら？」

「ど、どうだろうね……」

「いっそキスでもすれば丸分かりなのでしょうけど」

「……し、しないよ？」

「私だつてしないわよ。こんな公衆の面前でキスだなんて、バカップルにも程があるもの」

「……路地裏はセーフなの？」

「セーフね。断然セーフ。国民的漫画のはずなのに何故かキャストオフできるフィギュア並みにセーフね」

「どのくらいセーフなのかまるで分からない……」

「まあいいわ。別に誰かにカップルとして認められたいわけじゃないもの。ただ、貴方が私を見ていてくれればそれで……」

「……………」

「そこで目を逸らす照れ屋な貴方も好きよ」

「ッ……メルトリリス、今日絶好調だね」

「当然でしょう？ 愛しの彼が私のためにわざわざ遠路はるばる秋葉原まで連れてきてくれたのですもの。アガらないわけないわ」

そんなに喜んでもらえて嬉しい限りだけど、先程からの攻勢はそろそろ止めたい。愛しさのあまりいきなり抱きしめたり頬を撫でてでも誰も咎めない自室と違ってここは街中、周囲は他人でいっぱいなのだ。

「……ほら、頬に生クリームついてるわよ」
メルトリリスはそんなことを言った。

「え、どこ？ 어디?」

「そこじゃないわ。もつと右」

「こ、ここかな……」

「なかなか取れないわね……私が取ってあげましょうか？」

「いいの？」

「ええ、任せて。だから、もう少し近寄って」

「ありがとう。じゃあお願い」

言つて、何の警戒もなく顔を寄せた僕に、

「……んっ」

「ッ!？」

メルトリリスは、さも当然のように僕の頬をべろりと舐めた。

「はい、取れた」

「ね、メルトリリス!？ な、何を……」

「あら、どうしたの？ そんなに顔を赤くして」

「い、いや、どうしたも何も……」

「ほら、私手が不器用でしょう？ だから、代わりに舌を使っただけ。道理にかな

っているでしょう？」

「そ、そんな馬鹿な……」

「何？ ご不満？」

「そ、そんなことはないけど……」

「そう。ならよかったわ。少しだけ、破廉恥な女と、嫌われてしまいかと不安だったの」

「……それはないよ。どんな君だって、僕は好きだから」

「……ありがとう。優しいわね、私のマスターは。そんな優しいマスターには、」
言って、メルトリリスは僕の耳元へそつと唇を寄せ、

「……もう一度、してあげましょうか？」

そう、甘くささやくのだった。